

# 簿記初学者の特性に関する一考察

—学生生活・学修環境と学修達成度の関連を中心として—

山 根 陽 一

## I はじめに

本研究の目的は、簿記初学者の学生生活や学修環境が学修達成度に及ぼす影響を検証し、その結果から今後の簿記教育に資するインプリケーションを示すことにある。

我が国における簿記教育に関する先行研究は、簿記教育現場の実態調査や教員・学生に対するアンケート調査、日商簿記検定をはじめとする検定試験を対象に、簿記・会計関連の授業内容を取りまとめて分類したり、実施したアンケートの結果を分析したりすることで、教育現場の傾向について考察しているものが多く、客観的データに基づいた要因分析は、ほとんど行われてこなかった。

近年、中村(2015)や山根(2016、2017a、2017b、2018)によって簿記の学修成果に影響を及ぼす要因分析が行われ、いくつかの観点でその実態が明らかになっている。中村(2015)では、アンケートによる自己評価に基づいて、国語や数学といった教科の得意・不得意や授業の出席状況などが入門レベルの簿記の成績に影響を及ぼすか否かを検証しており、数学や理科といった理科系の科目および情報の得意度が成績に影響を与えることが示されている。山根(2018)では、出身高校偏差値や国語・数学・英語の成績、GPAといった学力指標と簿

記の成績の関連を検証しており、GPA及び数学の成績が簿記の成績に影響を与えることが示されている。また、山根（2016）では、入試種別や性別、出席率といった履修者の属性と簿記の成績の関連を検証しており、学力試験を経て入学した者ほど高い成績であること、出席率と成績に相関がないことが示されている。そして、山根（2017b）では、学修動機や目的意識について、数字・数学に興味関心のある者や簿記に興味関心のある者および日商簿記3級を受験している者が良好な成績を収めていることが示されている。さらに、山根（2017a）では、学修過程における個別の学修項目の理解と簿記の成績の関連を検証しており、授業序盤で取り扱った簿記の一巡の理解が、簿記の成績に影響を与えることが示されている。

本研究では、簿記学修者の学生生活・学修環境に焦点を当て、学修達成度との関連について、客観的データに基づいた統計処理を通して検証する。

## II 調査内容および分析方法

### 1 対象授業の概要および分析対象者

本研究で分析対象としたのは、筆者が担当した大阪経済法科大学経済学部において開講された初級簿記である。初級簿記は、半期4単位（週2コマ）の全30回で実施している科目であり、学修範囲は日本商工会議所簿記検定試験3級（以下、日商簿記3級）である。なお、多くの履修者が、課外講座で6月または11月に実施される日商簿記3級に向けた学修をしている。

分析対象者は、2013年度から2017年度までの5年間の全履修者368名から、学修経験のバイアスの少ない普通科高校出身の1年生246名を抽出し、対象データを把握できる187名とした。

### 2 分析手法

分析は、学生生活・学修環境に関する指標として、一人暮らしの有無、通学時間、奨学金の給付・貸与の有無、サークルの加入の有無を用いた。そして、

簿記の学修達成度は、授業理解度<sup>1</sup>、期末試験の点数<sup>2</sup>、日商簿記3級の成績<sup>3</sup>を用いた。また、簿記学修に限定しない一般的な学修達成度として、対象授業と同期間の単位取得率とGPA<sup>4</sup>を用いた。これらの4つの学生生活・学修環境に関する指標と5つの学修達成度の関連についてt検定、分散分析を使用して検証した。

### 3 分析指標

学生生活の指標として、一人暮らしの有無について2区分で標本を作成した。簿記の学修達成度として、授業理解度、期末試験の点数、日商簿記3級の偏差値を用い、一般的な学修達成度として、単位取得率とGPAを用いた。「一人暮らしの有無と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、t検定を実施し、結果の解釈を行う。

学修環境の指標として、通学時間を30分以下、30分超60分以下、60分超90分以下、90分超120分以下、120分超の5区分で標本を作成した<sup>5</sup>。簿記の学修達成度として、授業理解度、期末試験の点数、日商簿記3級の偏差値を用い、一般的な学修達成度として、単位取得率とGPAを用いた。「通学時間の相違と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、分散分析を実施し、結果の解釈を行う。

学生生活・学修環境の指標として、奨学金の受給状況について、給付型奨学

- 1 授業理解度は、各回における復習問題の正答率がおおむね7割を超える答案を理解しているものと判定し、復習問題21回分のうち、理解と判定した答案の割合を使用している。なお、復習問題によって問題数の多寡があり、点数評価ではなく7割の正答で理解・未理解を判定した。
- 2 対象年度は、同様の学修項目・水準の問題を出題しており、同質性を確保している。
- 3 同質性を確保するため、各回の得点を偏差値換算したものを使用している。
- 4 対象授業と同期間のGPAを使用し、対象授業の影響を除去するために、対象授業の成績を除外して算定したものを使用した。
- 5 通学時間は、自宅から大学までの所要時間をGoogleマップの経路検索機能を使用して算定した。なお、対象大学には2つのキャンパスがあり、授業が開講される花岡キャンパスへは多くの学生がスクールバスを使用しており、スクールバスを使用する学生には、バス停（八尾駅前キャンパス及び瓢箪山駅）までの所要時間に一律で20分を加算して標本を作成している。

金の給付、第一種奨学金（無利息）の貸与、第二種奨学金（有利子）の貸与、受給なしの4区分で標本を作成した<sup>6</sup>。簿記の学修達成度として、授業理解度、期末試験の点数、日商簿記3級の偏差値を用い、一般的な学修達成度として、単位取得率とGPAを用いた。「奨学金の給付・貸与の有無と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、分散分析を実施し、結果の解釈を行う。

学生生活・学修環境の指標として、サークルへの所属の有無について、文化系サークルに所属、体育系サークルに所属、所属なしの3区分で標本を作成した。簿記の学修達成度として、授業理解度、期末試験の点数、日商簿記3級の偏差値を用い、一般的な学修達成度として、単位取得率とGPAを用いた。「サークルの所属の有無と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、分散分析を実施し、結果の解釈を行う。

#### 4 記述統計

各指標・区分に従って作成した標本の記述統計は、表1と表2のとおりである。

一人暮らしの有無の区分では、GPAと単位取得率といった一般的な学修達成度において、下宿暮らしの学生の平均値が高い傾向にあるが、簿記の学修達成度では、逆に授業理解度、期末試験において、実家暮らしの学生の平均値が高い傾向にある。ただ、日商簿記3級は、授業外で測られる学修達成度であるGPA、単位取得率と同様に下宿暮らしの学生の平均値が高い傾向が確認できる。下宿暮らしにおける学業成績に対するモチベーションは、学費に加え生活費も必要となる環境から生じる責任感によるものと推察されるが、簿記学修において実家暮らしが学修達成度に与える要因は、見い出すことができなかった。

通学時間の区分では、GPAと単位取得率といった一般的な学修達成度において、通学時間が30分以下の最も短時間の学生の平均値が高い傾向にあるが、簿記の学修達成度では、通学時間90分超から120分以下の比較的大学までの通学

6 受給の重複については、受給基準の高い奨学金への区分を優先して標本を作成している。

簿記初学者の特性に関する一考察

表1 記述統計：授業理解度・期末試験・日商簿記

指標	区分	授業理解度			期末試験			日商簿記		
		度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
全体		187	67.1%	0.174	187	76.8	20.847	187	49.4	9.946
一人暮らし	実家	152	67.5%	0.171	152	77.1	21.364	152	49.3	10.011
	下宿	35	65.8%	0.190	35	75.9	18.688	35	50.2	9.761
通学時間	～30分	19	67.5%	0.165	19	77.6	14.565	19	48.2	9.091
	30～60分	25	63.5%	0.196	25	75.2	22.055	25	50.4	11.197
	60～90分	66	65.2%	0.170	66	73.4	24.591	66	48.6	9.886
	90～120分	63	70.3%	0.168	63	81.7	17.761	63	50.6	9.309
	120分～	14	68.3%	0.191	14	72.9	17.289	14	48.4	12.349
奨学金	なし	92	67.0%	0.164	92	75.5	21.819	92	48.8	10.088
	給付型	11	79.4%	0.132	11	95.5	5.222	11	57.5	6.176
	第一種	16	79.4%	0.152	16	83.8	13.964	16	53.8	8.686
	第二種	68	62.5%	0.178	68	74.0	20.815	68	48.0	9.799
サークル	なし	160	66.5%	0.171	160	76.9	20.755	160	49.4	9.925
	文化系	11	79.7%	0.150	11	85.5	10.113	11	52.2	7.286
	体育系	16	64.6%	0.197	16	70.3	25.591	16	48.1	11.828

注) 平均値が良好な項目に網掛けをしている。

表2 記述統計：GPA・単位取得率

指標	区分	GPA			単位取得率		
		度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
全体		187	2.82	0.689	187	93.5%	0.112
一人暮らし	実家	152	2.80	0.706	152	93.1%	0.117
	下宿	35	2.90	0.612	35	95.0%	0.082
通学時間	～30分	19	3.04	0.601	19	95.5%	0.083
	30～60分	25	2.73	0.676	25	94.1%	0.102
	60～90分	66	2.71	0.724	66	91.6%	0.125
	90～120分	63	2.91	0.659	63	94.8%	0.110
	120分～	14	2.78	0.757	14	92.5%	0.099
奨学金	なし	92	2.83	0.672	92	93.8%	0.097
	給付型	11	3.41	0.392	11	99.3%	0.023
	第一種	16	2.99	0.511	16	98.5%	0.046
	第二種	68	2.67	0.733	68	90.9%	0.139
サークル	なし	160	2.82	0.702	160	93.4%	0.113
	文化系	11	3.18	0.333	11	99.3%	0.022
	体育系	16	2.56	0.657	16	90.2%	0.125

注) 平均値が良好な項目に網掛けをしている。

時間の長い学生層の平均値が高い傾向にある。通学時間が最短の層がGPA、単位取得率の平均値が高いのは、大学へのアクセスの利便性によるものと推察されるが、簿記学修において平均値の順位が異なるのは、アクセスの利便性に優る他の要因が簿記学修に影響を与えている結果だと考えられる。

奨学金の区分では、すべての項目において給付型奨学金に採用されている学生の平均値が高い傾向が確認できる。また、すべての項目において、給付型奨学金受給者、第一種奨学金採用者、奨学金の受給なし、第二種奨学金採用者の順で平均値が高い傾向にあった。給付型奨学金や第一種奨学金の採用には、高い学業成績が求められることから、奨学金採用時の学業成績との関連が伺える結果と考えられ、特に給付型奨学金の受給者の平均値は極めて高い傾向にある。

サークルの区分では、すべての項目において文化系サークルに所属する学生の平均値が高い傾向が確認できる。サンプル数は少ないが標準偏差も低く、文化系サークルに所属する学生が総じて学修達成度が高いことが伺える。また、すべての項目において、文化系サークル所属、サークル所属なし、体育系サークル所属の順で平均値が高い傾向であった。体育系サークル所属は、部活動に専念する学生もいることから、生活における時間配分において学業への優先順位が低くなりがちだとも考えられる。

記述統計から確認された平均値の差について、t検定・分散分析を実施することによって、統計的に有意な差が認められる項目を明らかにし、学生生活・学修環境と学修達成度の関連について考察する。

### Ⅲ 分析結果および解釈

「学生生活・学修環境の相違と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、各指標と学修達成度（4項目×5項目）についてt検定・分散分析を実施した結果が、表3である。

一人暮らしの有無の区分及び通学時間の区分では、全ての項目で有意な差は観察されなかった。したがって、この結果から導き出されるインプリケーショ

簿記初学者の特性に関する一考察

ンは、一人暮らしの有無や通学時間の相違は、学修達成度に影響を及ぼさないという解釈となり、個々の学生状況に沿った指導に頼ることが求められる。なお、通学時間と各指標の相関係数は、すべての項目において0.1未満であった。

表3 t検定・分散分析結果

	授業理解度	期末試験	日商簿記	GPA	単位取得率
一人暮らし	0.445	0.367	0.971	0.096	0.114
通学	1.010	1.509	0.488	1.334	0.907
奨学金	6.659 ***	4.271 ***	4.229 ***	4.326 ***	3.426 **
サークル	3.205 **	1.738	0.548	2.663 *	2.253

注1) \* :  $p < 0.1$ , \*\* $p < 0.05$ , \*\*\* $p < 0.01$  (両側)

奨学金の区分では、すべての項目において1%以下の水準で有意な差が観察されており、奨学金の受給の有無が学修達成度に強く影響を及ぼしていると解釈できる。しかし、この結果は記述統計上、給付型・第一種と第二種の平均値に大きな開きがあることから、奨学金の区分の差に大きく影響を受けた結果と推察される。そこで、奨学金の受給の有無のみでt検定を実施した結果、受給の有無による学修達成度の有意な差は観察されなかった。したがって、奨学金の受給の有無ではなく、奨学金区分の差とみなすことができ、これは奨学金採用時の学業成績による有意差と考えられる。

サークルの区分では、授業理解度のみ5%以下の水準で有意な差が観察された。文化系サークル所属の平均値の高さから導き出された結果と考えられ、サンプル数が少ないながらも有意な差が観察された。なお、サークルの所属の有無のみでt検定を実施した結果、所属の有無による学修達成度の有意な差は観察されなかった。ただ、授業出席率については、記述統計においてサークル未所属者と所属者がそれぞれ80.8%と86.7%であり、t検定を実施した結果、5%以下の水準で有意差が確認された。これは、文化系に限らず、サークル所属者の大学への滞在時間の長さに起因するものと考えられる。文化系サークル所属者の授業理解度の高さは、大学への滞在期間と学業への優先度がサークル活動によって低下することがないためであると推察される。

#### IV おわりに

本研究の目的は、簿記初学者の学生生活や学修環境が学修達成度に影響を及ぼすのか否かについて統計処理を通して明らかにすることであった。得られた結果は、①一人暮らしの有無によって、学修達成度に差は認められないこと、②通学時間の違いによって、学修達成度に差は認められないこと、③奨学金の受給の有無によって、学修達成度に差は認められないが、奨学金の内容によって学修達成度に差が認められること、④サークルの所属有無によって、学修達成度に差は認められないが、文化系サークル所属者は簿記の授業理解度が高くなる傾向があることであった。この結果から、学生生活や学修環境が簿記の学修成果に影響を及ぼしていないものと推察される。

簿記の学修成果に影響を与える要因は、無限に分析対象が存在し、学修意欲、基礎学力、学修習慣、生活習慣といった学力を構成する様々な要因が複合的に作用しながら構成されており、一概に結論を導き出すのは難しいと考えられる。中村(2015)や山根(2016、2017a、2017b、2018)の先行研究において、学修意欲や基礎学力、学修習慣が簿記の学修達成度に影響を与えていることが示されているが、これらの観点を総合した分析を今後の課題としたい。

また、本研究は、筆者が担当した授業を履修した学生を対象とした結果であり、直ちに一般化できるものではない。

#### <参考文献>

- 中村英敏(2015)「簿記の成績に影響を与える要因の分析—各教科の得意度・出席状況・性別等と成績に関する調査—」『日本簿記学会年報』第30号、75-83頁。
- 山根陽一(2016)「初年次簿記科目における学習者の特性に関する分析—設問間と属性の関連を中心として—」『大阪経済法科大学 経済学論集』第39巻第1・2号、51-65頁。
- 山根陽一(2017a)「関連性分析による簿記初学者の特性に関する一考察—項目理解と学修達成度の関連を中心として—」『会計教育研究』第5号、日本会計教育学会、73-81頁。
- 山根陽一(2017b)「簿記初学者の特性に関する一考察—学修動機・目的意識と学修達成度の関連を中心として—」『大阪経済法科大学 経済学論集』第41巻第1号、27-36頁。
- 山根陽一(2018)「簿記初学者の特性に関する関連性分析—学力指標と学修達成度の関連を中心として—」『簿記研究』第1巻第1号、日本簿記学会、30-41頁。